

インターポート

兵庫教育文化研究所だより

No.187

2017年12月5日

発行所 兵庫教育文化研究所
〒650-0004

神戸市中央区中山手通4-10-8

“思いやり”について考える 人権教育部会 授業研究会

11月、三田市の小学校で、人権教育部会の授業研究会を実施しました。人権教育部会では、「特別の教科道徳」の実施にむけ、「人権教育の視点や『アクティブ・ラーニング』を取り入れた道徳の授業づくり」とりこんでいます。今回は6年生の道徳で「車いすの少女」という資料を使っの授業でした。



資料自体は、短いものです。車いすの少女が困っているのを見つけた男の子が手を貸そうとしたとき、少女の母親が「やめてください」と声をかけます。様子を見守っていると、少女が自力で問題を解決し、その後、お母さんが男の子にお礼を言う・・・という話でした。



授業は、資料を途中まで読んで発問する、という形ですすめられました。「男の子が手を貸そうとした行動をどう思うか」、「母親の『やめてください』という言葉はどう思うか」、そして最後まで読んだあと、「この母親についてどう思うか」、自分の意見をグループで交流し、全体に広げるように話し合いがすすみました。

「思いやり」を主題としたとき、「こうあるべき」と模範になるような行動を教え込んだり、ある行動だけがよくて他はよくないと子どもたちがとらえたりするような授業になってはいけないと、事前研から話し合われてきました。今回の授業では、男の子の行った行動も、母親の思いも、どちらも少女を思っのことなのだという考えが子どもたちから発表され、「様々な思いやりの形を知る」という本時のねらいは達成されたのではないかと思います。

事後研究会では、「この母親についてどう思うか」を考える場面で「普通のお母さん」と答えた児童について話題になりました。なぜそう思ったのかを教員がたずねた際、そう書いた児童はくわしくは答えませんでした。他の児童と一緒にその意味を考えたことで、全員がより深く考える機会になったのではという意見もありました。また、普段の学級づくりや児童の人間関係に配慮した席の配置などにより、グループによる話し合いが機能していたという意見も出ました。

まず自分の意見をしっかり持ち、それを表現できる仲間づくりができていからこそ、思いやりについてより深く考えることができたのではないのでしょうか。人権教育の視点で授業をすすめるには、互いを認め合える学級づくりが基礎となることを再認識できた授業研究会となりました。

本授業の指導案は、組合員専用HP（「兵教組」で検索）で公開しています。ぜひご覧ください。